



私の趣味《1》

犬といっしょ～ヨークシャテリアの魅力

中森三千代 (中森皮膚科クリニック)

これが趣味と言えるのかどうか迷いました。ドッグショーに出たり、ブリーダーをやる訳でもなく、犬と一緒にだと幸せで顔がほころぶという至って能天気なものです。大部分が飼っていた犬の思い出話になってしまいました。

犬好きに目覚めたのは、小学校1年生の時にディズニー映画の『101匹わんちゃん』を観て以来で、母に無理矢理頼み込んで日本スピッツを飼ったのが最初の出会いです。当時はまだペットブームではなく、おしゃれな西洋犬など簡単に手に入らなかったのです。無駄吠えが多いという理由で、日本スピッツを最近では滅多に見かけなくなりましたが、白い可憐な姿に出会うと大変懐かしくなります。

大学3年の時、再び犬が恋しくなり、初代のヨークシャテリアを飼うことになりました。この時も母は、「あなたは可愛がるだけでちっとも世話をしない」と結構しぶりましたが、飼っているうちにすっかりヨーキー（ヨークシャテリア）のママになってしまいました。

初代は、血統書に歴代チャンピオンがずらりと並ぶ貴公子でした。ヨーキーの毛色はスティールブルーとタンと記載され、タンは英和辞書では黄褐色ですが、実際は黄金色と言った方が適当です。スティールブルーも歳と共に絹糸のような光沢のシルバークレイになってきます。もう少し大型のシルキーテリアという犬種も同じ毛色です。

初代の王子郎は大変賢く、気品があり、容姿端麗で母も私もチャーミングな金髪の王子様の虜になってしまいました。彼は、医学部時代の試験や国家試験の勉強にも夜中までつきあってくれた仲間でもありましたが、先天性心疾患を持っており、私が出向中に5歳で急死してしまいました。

2、3代目はメスでしたが、2匹とも非常に短命でした。2代目ルクレチアは、美女ルクレチア・ボルジアから命名し、大変なお転婆でしたが、わずか1ヶ月で病死しました。3代目は、寂しさに耐えら

れなくなった父が、ペットショップでほとんど衝動買いをしたペパーミント・パッティーです。可愛い名前にも母は得意でしたが、1週間でジステンバーのためはかない命を閉じてしまいました。見かねた獣医さんがブリーダーから直接連れてきてくれたのが、4代目のオスのアンソニーです。映画『トワイライトゾーン』の主人公の超能力少年から命名しました。見かけは上品でおとなしそうですが、非常に男臭く（体臭も4匹中1番犬臭く）、ショーン・コネリー並みの魅力がありました。逃亡癖があり、散歩の他に、門や逃亡対策の金網をかいくぐり、満足すると何事も無かったかのように帰宅します。たびたびの逃亡に、母と私は、ご近所にアンソニーそっくりの子犬が生まれたらどうしようと冗談を言っておりました。下の写真は、毎月通っていた美容室で撮ってもらったもので、こんなきれいな姿は当日くらいで、翌日はボサボサ、土埃で汚れておりました。私と一緒に写真は、父が撮っていたはずでしたが、父が遺した膨大な枚数の写真は未整理のまま、今回適当なものが見つかりませんでした。

アンソニーは昨年8月に18歳7ヶ月で命を終えました。当日まで庭を歩いていたということですから、大往生なのでしょう。

犬は決して動くぬいぐるみなどではなく、どの犬も立派な思考や個性（犬格?）を持っておりま



ワンワンという吠え声は飼犬独特で、人間の言語をまねているという説があり、人間との長い生活歴から、彼らの方が私達に合わせてくれているようで

す。現在は、母が高齢、私も多忙で、5代目が飼える状況ではありませんが、またいつの日か犬と一緒に生活をしたと思っております。



私の趣味《2》

私のたのしみ

太田真由美

私の趣味という題名で何か原稿をとられとても困ってしまった。というのは、これといって他人に言えるほどの特別な趣味など私にはないからである。そこで今回まことに勝手ながら題名を変えさせて頂き、“私の趣味”から“私のたのしみ”へとさせてもらうことにした。

私のたのしみ、それはズバリ“食べ歩き”である。今や世の中グルメ志向であり、食通という人たちがほぼ日本中、いや世界中食べ歩き、その体験談を書いた記事が週刊誌やら雑誌やらをにぎわしている。私の食べ歩きのたのしみは、いわゆる“グルメ”“贅沢”というものとはすこし異っている。たしかにたまには有名な料亭やレストランで最高級と言われるものを食べに行ったり、地方に行った時にはその地の特産物を思う存分贅沢に味わうことも私にとってのたのしみには違いないのだが、私にはもうひとつとくにこだわっている食べ歩きがあるのだ。じつは「牛肉の食べ歩き」なのである。そこでこれから、この場をお借りして「私のたのしみ、牛肉の食べ歩き編」として今までの思い出やおもしろいエピソードをいくつか紹介させて頂くことにする。

米国、カナダに留学（遊学）中にはとくに多くの思い出がある。フロリダでの学会で、ディズニーワールドでくたくたになるまで遊び歩き、お腹ペコペコでとあるレストランに入った。メニューの中でもいち早くチェックしたのが、“Beef”の欄、USAは当然ビーフメニューも豊富。さて今日はどんな獲物があるのかなと早急みしてみると、“Today's special、2ポンド（約1kg）Tボーンステーキ”に目がいった。1kgとは言っても骨を含めて1kgならばたいしたことはないと思い、前菜、サラダ、スープ、パ

スタと共にオーダー。店員いわく“Too much! やめておいた方がいいですよ”と忠告。しかしそう言われるとますます食べたくなる。「旅の思い出としてぜひ…」とムリやりオーダー。店員はしぶしぶ承知してくれた。そしていざ出されたものを見てみるとたしかに巨大なわらじ大のもの、丈夫な骨の周りにとろけるばかりの脂肪付。Tボーンステーキは1枚でサーロインの部とヒレの部が味わえて最高！とガツガツ食べはじめた。空腹の巨大胃をもつ私はあっという間にペロリと平らげた。おまけにその後デザートまで追加オーダー。これには店員“Oh! My God!”と驚きの声。先ほどは失礼なことを言ってしまったとおわびに大きなパイを「私のおごりです」とサービスしてくれた。

またカナダのあるレストランではメニューに“スペシャルキングサイズ挑戦者歓迎”というのがあり、これはおもしろいとオーダー。店員いわく「単なるオプションです。ましてや小柄な女性が注文するものではありません。やめておいた方が無難です」と。そう言われるとますます挑戦欲がわいてくる。ゴリ押ししてオーダーした。運ばれてきたものは700～800gのものであったが、店員はなんとドギーバッグ（俗にいう残飯ケース）まで一緒につけてきた。「くれぐれも無理はしないように」と繰り返し言葉をかけていった。しかし、そんな心配は御無用。結局残さず平らげ、不要となったドギーバッグは返却。口をぽっかりと空けた店員がやがてつけ加えてこう言った。「実は我が店では、今あなたの食べた肉を3枚完食したら無料です。しかも賞金もつきます。そして見事完食した方にはこのように記念の写真とサインを店に飾らせてもらっています。ちなみにこ

れらの方々は現在御活躍中のボクサー、レスラー、スポーツ選手が大半です」と。たしかに店に入った時、飾られた写真の多いことは気づいていたが、まさかこんな意味があったとは。見れば見るほど巨漢、大食いといった顔ぶれ。3枚も食べられる自信はさすがにないが、万が一成功して写真を並べられるのははたして光栄か？ 主人いわく「私はあなたの写真がここに並べられたらその日からあかの他人にならせてもらいます」。

又、カナダでは、ビーフ好きの私が最も好物としているビーフリップが食べられると聞き、さっそく入った。店内に入っただけで分かる脂のこげろにおい、これがまた食欲をそそる。メニューにはレギュラーサイズとして骨付き肉4本というのがあるが、おそらくそんなのでは物足りない。しばらくメニューを見てみるとなんと食べ放題があるではないか。しかも料金はレギュラーサイズより少し高いだけ。これは決定！とさっそくオーダー。店員いわく「女性はせいぜい2～3本で脂っこいと言ってgive upします。レギュラーサイズでも多めですからsmall sizeにしてみたら」と言う。たとえ2～3本しか食べられなくてもきちんと食べ放題料金は払うからとムリを言ってオーダー。店員さんはとても慎重に2本ずつ出してきた。偶然となりのテーブルでも老夫妻が御主人様の誕生日記念にと食べ放題をたのしんでいた。御主人様は70歳位だろうか、体格も良くいかにも肉好きといった感じであった。「私は今年は8本食べたぞ。私の胃はまだまだ丈夫さ」と誇らしげであった。一方私の方はというと、大好物のリブステーキにありつけたうれしさで、2本、また2本そして2本と追加し、10本めを食べ終えた。こんなにおいしいといくらでも食べられるわ、と言いながら回りを見てみると、何やら異様な雰囲気気づいた。サーブする店員のみならず、数人の店員が私をじっと見つめている。そして周囲のテーブルからも何やら視線が集まっているのだ。しかし、かまわず2本さらに2本と追加、14本めを食べ終えた時には回りから歓声のようなものがあがり、明らかに店じゅうの注目を浴びていたことに気づいた。今までの満足感とたのしみは一気にさめ、食欲は急に減退。結局14本めをさいごにやめた。帰り際の会計時に店からテイクアウトの時に使える割引券を手渡された。家でもたのしめますよ、と。おそらくこんな風に食べ

られては赤字という理由からと思う。ビーフリップに目のない私としては、この割引券をフルに使って、以後もたのしみを味わうことができた。周囲の目を気にせずに…。食べ放題に比べ割高であるが。

又、神戸での学会の際のこと、神戸といえば神戸牛、学会よりもついつい牛肉の食べ歩きに気がいってしまう。案の定、学会の冊子にプラス数冊の旅行ガイドブックを持ってたのしみの旅に出かけた。カナダ、米国の肉は安くてボリュームがあるが、味については日本の牛肉にはかなわない。せっかく休みをとって学会へ行くのだからと、地元でも評判のよい店をチェックして出かけた。とある名店へ行き、値段など全く気にせずにたのしみの実行開始。1人前をペロリと食べたあと、そのおいしさに感激。たのしみのためならと財布のひもはゆるむだけゆるみ、2人前、そしてもう1人前、と追加した。お店の御主人がとても驚き、しかし喜んでくれ、「こんなにおいしそうに豪快に召し上がってくれる方はめったにおりません。これサービスしちゃいます」と2～3人前はあろうかと思う大きめの霜降り肉を主人と2人でごちそうになった。こんな感じで神戸の学会はたった2泊3日だったがとんだ予算オーバーとなってしまった。

しかし、この時のたのしみは今でも忘れられず、又機会があったら行こうと思っている。

他にも牛肉の食べ歩きにまつわる思い出は多々あるが、スペースの都合上この辺にしておく。

昨年狂牛病騒ぎの時には、多くの友人が私のことを心配してくれた。「君にとっては本当に不幸な出来事だね。まったく気の毒だ。不安で食べる気がしないでしょ？」と。しかし私は言った。「牛肉を食べないで気が狂うくらいなら、狂牛病にかかる方がまだましよ。狂牛病で死ぬるなら本望よ」と。

実際どんなニュースにも動揺せず、ほぼ毎日牛肉を食べ続けた。スーパーの陳列だなの牛肉コーナーが狭くなるのをさみしがったり、顔なじみの焼き肉屋が店をしめてしまうという悲しみはあったが…。

かけごと好きの友人が、こんな私の未来についてかけあっていた。はたして私は狂牛病で命をおとすのか、それとも肥満、DM、動脈硬化等が原因で命をおとすのか？と。中には胃破裂説までも…。

さて、神のみぞ知る。



私の趣味 《3》

私の趣味

犬井三紀代

歌（私の場合は、オペラアリアや歌曲を歌うこと）は、私にとって人生そのもの。

どんなに疲れ、意気消沈していても、音楽が聞こえてくると、渴いた身体に水が沁み渡るように喜びで満たされ、まあいいか、何とかなるだろうと元気になってくる。三度の飯よりも好きで、1食なら抜いても浸っていたいが、2食抜くとエネルギー不足でヘタってしまう。

風邪をひいたり、忙しくて歌が歌えなくなると、感情がカスカスになって、抜殻みたい、歌を忘れたカナリアのように感じる。

一旦、歌の世界に入ってしまうと、日常は消え去り、心は自由に喜び、踊り、嘆き、哀しみ、もつれた感情も縦・横・斜めに羽を伸ばし、すっきりしてしまう。文明国では、嘆きや哀しみは、心の健康や成功を妨げるもの、避けるべきことと考えているようで、映画でも最近では哀愁の漂うものが少なくなっている。しかし、実は嘆きや哀しみは、人恋しさを掻き立て、心を暖めてくれるものではないだろうか？

夏、診療で息つく暇もなく、まるで昼どきのファーストフード店のように、水虫バーガー、トビヒバーガー、カブレバーガー…とマニュアルをこなすだけになって、心が擦り切れてきたとき、音楽によって自分を取り戻し、周囲の景色も語り掛けてくる程息を吹き返してきたとき、つくづくミュージックに感謝の念が湧いてくる。

先日、母校（都立高校なのに、普通科の他に保健体育科、芸術科各1クラスが併設されていた）の創立100周年記念コンサートがあった。第1部・鮫島有美子（芸術科）、第2部・加藤登紀子（普通科）という構成で、前半で美しい声と情緒ある歌の数々を堪能し、後半ポピュラーソング・シャンソンの世界に染まるという体験をした。クラシックの世界は、日常の憂さから離れて、あこがれに心が飛翔し、その場に別の世界がスクリーンの如く写し出されるよ

うで、一方、加藤登紀子の世界は、地にしがみついで、人生をとことん味わい尽くすよう誘う。ジャンルは違ってそれぞれの良さがある、人生の中でどれに親しみを覚えるのかが違って来るように思う。

歌のレッスンを始めたのは17才で、早や35年、歌をやめようと思ったことはない。転居や多忙、先生のご都合等で、今までに7人の先生に師事した。ベルカント（イタリア語で良く歌うという意味）は共通していても、先生によって重視されるポイントは様々で、結局身体楽器を如何に動かし、鳴らすかということで、何十年もやって、ようやく、先生方の注意を統合して、やっとコツをつかめてきたような気がしている。横隔膜を支えるため、腹筋、背筋、臀筋をコントロールし、鼻咽腔を広げるために、硬口蓋を挙上する。普通ではこんな筋肉意識もしないのに、一生懸命訓練して動くようになった。声を出すことに関しては、正にスポーツと共通している。しかし、風邪はもちろん、天候や疲労、食事のちょっとした加減で、声が鳴らないときがある。まして歌は、発声にとどまらず、そこに感情がこもってなければ、音楽にはならない。

オペラは、メロディで会話しているものなので、感情の起伏につれて音の振幅も大きくなり、アリアを歌っていると、モヤモヤは全て吹き飛んでしまう。そして、女王にも町娘にも修道女にさえもなれ、様々な時代、状況に身を置くこともできる。

一方歌曲は、詩の世界や、様々な言語のニュアンスを表現する楽しみがある。聞いて感動した曲は、例え何語でも、原語で歌ってみたくなり、楽譜、辞書を探して、CDを聴いて、チャレンジしてみる。どの国の言葉もそれなりの味わいがあり、その風土に生きる人々の営みが伝わって美しい。

今はまっているのは、ロシアロマンスと呼ばれる、19世紀以降のロシア歌曲である。ロシアと云えば、ソ連・KGBをイメージするが、ロシア語から入る

と、そこは、厳しいが自分達を育んでくれる母なるロシアの広大な大地へのあこがれと、秘めた情熱の世界を感じとることができる。ロシア語を教えていただいた先生宅でご馳走になったロシアのチョコレートは、どろりとした濃厚な味で、厳しい冬を乗り越えるには、この位の濃厚さが必要なのだろうと思わせるものがあった。春夏秋冬にコロコロ適応しているあっさりした日本人に比べ、ロシア語でロシ

アの歌を歌っていると、粘りが出てきそうな気がする。

どれが一番と決められない程、美しい歌は数々あれど、毎朝夕で聞かせてくれる小鳥の歌は、朝が来た喜びを全身で表現していて、かなわないと思う。朝のまどろみも捨て難いが、朝の合唱を聞き逃がしてしまうのはもったいないので、明日も早起きしよう。

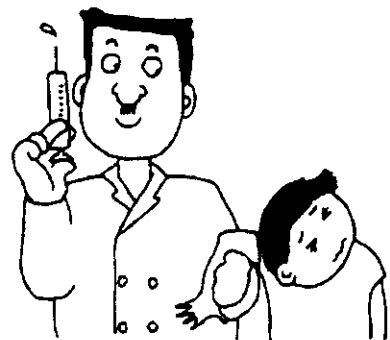
Information

原稿募集

随筆 写真 絵 イラスト 何でも歓迎いたします。

以下の様な仮の題にても原稿をお待ちしています。

- A) お宝拝見 → 秘蔵の一品
- B) 秘伝&私の工夫etc.
- C) うまくなならないGolfの話
- D) 患者さんに教わったこと
- E) 教授こぼれ話
- F) 私の近くのこんな店



等です。どしどしお寄せ下さい。ワープロで書かれた方は、フロッピーも送ってください。

顔写真（スナップでも構いません）もお願いします。

宛て先

〒234-8503 横浜市港南区港南台3-2-10
済生会横浜市南部病院 木花 光

TEL 045(832)1111
FAX 045(831)0833